The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Ross D. Parke, ”Future Families : Diverse Forms, Rich Possibilitys”, Wiley-Blackwell,2013
Author(s)	三品, 拓人
Citation	年報人間科学. 2015, 36, p. 31-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51231
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈書評〉

Ross D. Parke

"Future Families: Diverse Forms, Rich Possibility"

Wiley-Blackwell,2013

三品 拓人

はじめに

今日、「家族」のあり方やその問題点をめぐって様々な領域で議論が行われている。また、離婚率の上昇や不妊治療における科学技術の発達など、自明なものとしてとらえられてきた「家族像」に再考を迫る現象が起こっている。

戦後の日本の家族においては、性別役割分業によって母親が中心となり育児を担っていた。そのような育児体制は1980年代より育児の孤立化・密室化として捉えられるようになり、次第にその限界が認識されてきた。しかし、現在でも母親が育児をするのが「普通」であると考える人は少なくないだろう。そして新しい家族の可能性に関する検討が必要であるが、様々な家族形態が十分研究されているわけではない。

本稿で扱う著作はその幅広い検討によって、「伝統的」[1)]な家族による子育ての特権的な立場を相対化する試みである。同時に、子供の社会化という観点から新しい家族形態の可能性について検討している。以下で著者と著作について紹介していきたい。

著者と著作の紹介

本稿で取り上げる "Future Families: Diverse Forms, Rich Possibility" の著者は Ross D. Parke である。

パークは、アメリカの社会心理学者で、カルフォルニア大学リバーサイド校の名誉教授(distinguished professor)であり、家族研究センター長でもある。これまでイリノイ州立大学アーバナ・シャンペーン校とウィスコンシン大学で教鞭をとった。彼は、ウォータールー大学で Ph.D. を取得し、1960 年代から家族に関する研究を行っており、子供の発達に関わる多くの著作[2)]でも知られている。

本書はパークの単著であり、専門用語の使用を控えることによって専門家だけでなく、一般読者にも分かるように書かれている。多様な家族に対して、生物学、心理学、社会学、文化人類学をはじめとする複数の領域における先行研究を扱い、領域横断的な作業を行っている。

本書の目的は「家族の文化的な定義に関する新しい議論を生み出すことと、理想的とされる形態を超えて広く家族を論じること」(vii)である。そのために、家族として生活を営んでいくプロセス[3)]に着目している。また、家族形成の多様性を歴史的にも、グローバルにも認識するという点に注意が払われている。

本書の中心的なメッセージは「家族の営みの方が、家族の形態より重要」(vi)というものである。

本書の構成とあらすじ

本書は9章で構成されている。導入部分の1章、社会変動にともなう家族形態は2~5章において、他文化の協働的な子育てと拡大家族については6〜7章で紹介されている。8〜9章は具体的な提言である。

章のタイトルを見るだけでも、本書がいかに多様なトピックを扱っているか分かるので、以下では各章がどのように展開されているか概観していきたい。

１章の「理想の家族への挑戦」では、著者の問題意識を説明している。私たちは、完全性への欲求を持っており、理想を追求してしまう。著者は「この完全性の追求という概念が、現代の家族の見方にも同様に広がっている」(1) と警鐘を鳴らす。つまり、ある価値観によって望ましい家族の形態が決まると、人々はその形態を目指すようになるということである。

では、「理想の家族」とは何だろうか。著者によれば、「父親が稼ぎ手で母親が家事をし、芝生と白いフェンスで囲まれた安全な郊外で子供と暮らすような家族」(1) である。この理想像は1950年以降アメリカにおいて浸透した。「理想の家族」はいくつかの条件から成り立っている。具体的には、a親の数は「2人」で、b「結婚」しており、c「ヘテロセクシュアル」で、d「父親」が一人で稼ぎ、e子供のケアは専ら「親」によってのみ行われるという条件である。

しかし、実際には「理想の家族」以外にも多様な家族が存在している。著者はこの理想の家族への挑戦としてオルタナティブ家族を対置させる。多様な家族形態を見ていくことこそ、理想の家族への挑戦であり、本書の目的である。

2章の「変化する親役割―家族の責任の共有と再分配」では、従来の性別役割分業を批判的に検討することにより、父親の育児[4)]や共働きで生計を立てる家族の可能性について論じている。母親の育児を推進した根拠の１つとして、女性は母親になることでホルモンバランスが変化するという研究があった。しかし、2000年代の研究では、男性も父親になることで女性と同じようにホルモンバランスが変化することが明らかにされている[5)]。つまり、男性も女性もどちらか一方が子育てに適しているということは言えない[6)]。

3章の「『理想』の家族形態へのさらなる挑戦」では、離婚率の上昇という社会現象に伴う親子の形態について論じている。具体的には、シングルペアレントの親子、ステップファミリーがあげられる。離婚によりシングルになるという選択はネガティブに捉えられることもあるかもしれないが、著書の評価は異なる。離婚の危機に直面すると、夫婦間または子供との間に様々なコンフリクトが生じる。逆説的であるが、2人の親という形態を重視して子どものために一緒にいることは、子供がコンフリクトの多い家庭にいるということでもあり、子供の発達によい影響を与えないだろう。たしかに、離婚後うまくいかない家族もいる。しかし全ての離婚した家族が同じわけではない。なぜ差が出るのだろうか。その答えを、結婚しているカップルの方が、同棲のカップルよりも学歴が高いために経済的にも有利であるという選択効果、カップルの関係性の影響、カップルが別れた後の子供への悪影響を減らすソーシャルサポートの有無という複数の要因で説明している。つまり、離婚後の形態が問題なのではなく、その中での営み自体や他の社会的要因がより重要であるということだ。

4章の「同じジェンダーの家族―二人の母親または父親はよいのか」では、アメリカにおける同性婚を

めぐる状況について説明した後、同性カップルの家族は異性カップルの家族と比べて異なるのだろうかと問う。ドナー受精のレズビアンカップルとドナー受精のヘテロセクシュアルカップルの比較研究をはじめ、実際にはアメリカの多くの研究では、家族形態による親であることの違いは見られていない。むしろ同性婚カップルが家事の義務や子供のケアをより平等に分割しているといったポジティブな側面も見られる。子供の社会化という面からみて、異性愛か同性愛という形態は関係ないのである。

5章の「何人の『親』は多すぎるのだろうか―生殖補助医療の前線からの洞察」では、科学技術の発達により引き起こされる新たな親子の問題[7)]について紹介している。新しい生殖技術は親であることの根拠を変化させ、拡大させている。そして、私たちに家族の定義や家族の範囲、家族生活への参加者についての再考を強いる。さらに、子供の出自を知る権利といった、一連の倫理的、社会的問題も生じている。

そのような状況において今、生物学的親と社会的親、その子供という三者の新しい関係性が模索されており、実際に第3の親としての代理母と関係を保っている親子もいる。この関係は拡大家族ととらえることができる。家族の営みはより新しい段階に突入しているのである。

6章の「多くの母親、多くの父親、多くの他人―他文化からの洞察」においては、母父同権の中央アフリカ共和国のピグミーと、子供には複数の生物学的父親がいると思われているベネズエラのバリインディアンが取り上げられている。この2つの民族の共通点はどちらも共同体ベースの子育てが行われていることである。文化人類学の研究を参照し、家族を超えて、ケアギバーとしての兄弟姉妹や祖父母、親族の可能性を紹介している。これらの事例から、西洋人にとっての「理想の家族」が、協働的な子育てが行われている非西洋の多くの文化ではどれほど例外的なものであったかうかがえる。

7章の「親戚と虚構の親戚」ではノースアメリカ（カナダ）インディアンやアフリカ系、ラテン系、アジア系アメリカ人の家族などアメリカへの移民の生活様式に関する研究が整理されている。どの移民にも様々な違いがあるものの、移住後に拡大家族を形成している点において共通する。その拡大家族とは、ただ三世代で居住するようなものではない。構造的により開かれており、複数の世帯を含んでいる。その複数の世帯に血縁関係はない。移住することによる経済的現実から親族も非親族も協力し合わなければ生活していけないという背景があるからなのかもしれないが、同じアメリカの中でも、「理想の家族」とはかなり異なった家族が形成されている。

8章「複数のケアギバー―ケアギバー自身にとって有害か有益か」では、ケアギバーになることの意義が考察されている。親であっても他人であっても子供を育てるということには、ネガティブな側面―費用がかかり、労働は大変で、心理的にも疲れる、など―がある。その一方で、ポジティブな側面―精神的な満足感や喜びなど―もある。どのようにしたら私たちは子育てをよりうまく行えるかという問いに、核家族の外の子育てのアシスタントをマイナスに（自分の責任を果たしていないと）捉えるのではなく、親の責任を分有することが重要だと提案する。

9章の「オルタナティブ家族のサポートにおいて―変化するための障壁を越えて」では、オルタナティブ家族が社会に受け入れられ、生活が改善されるために、克服しなければならない障壁について論じている。そして、未だに核家族を理想として家族の狭い定義を想定することによる根本的な不公平を訴える。例え

ば、社会保障政策、税制、健康保険に関して、それらの制度が「理想の家族」に有利にできており、制度上結婚できない州の同性婚カップルや財政的には同棲カップルが恩恵を享受できない状況や、未婚の人は生殖補助医療に対して健康保険が使えないという事態、養子をとるための制限的な条件などが社会の実情にあっていないと批判されている。

本書の位置づけと評価

本書はどのような研究分野に位置づけられるかを考えると、大きく2つの研究分野に分けることができる。1つ目は、家族社会学の領域である。特に近年、家族変動に伴い近代家族による親子関係や子育ての仕方が相対化され、新しい親子関係・子育てのあり方が模索されている。伝統的な子育てに関する研究では「マルチペアレント」という概念が提唱されており、どのように現代において実現させるのかが問われている。例えば、日本でもDNA鑑定の結果にともない、父親は社会的親か生物学的親かを争う裁判が起こっており、微妙な問題をはらんでいる。そのような状況の中で、パークの新しい拡大家族についての議論は、どちらの親も親として生きていくという可能性を含んでいる。現実には、離婚後に別居している親との面会交流[8)]やステップファミリーといった血縁関係のない「家族」の営みが行われている。そのような当事者、特に子供にとってはまさにマルチペアレントは、すでに実践されているといえよう。どのように複数の親が成立するのか今後も議論が必要である。

2つ目は、子供の社会化論として位置づけられる。子供の社会化については、古くは社会学や心理学、近年では特に人間発達学といった領域において盛んに議論されてきた。その中で、子供の社会化過程において重要な関係とは母親か、それとも多様な人々との関係か、という論点があげられていた。前者は愛着理論に、後者はソーシャル・ネットワークモデルに基づく立場である。本書は、後者の立場に属している。また、子供の社会化を親に限定しないことの利点は、養育者側からも考えられる。それはシングルペアレントや共働き親子をはじめとした多様な家族にとってより現実的であるという点と、誰もが子供の社会化の担い手になれる可能性があるという点である。単身世帯が増加する中で、仮に自分に家族がいなくても、子供と関わることができるという社会のあり方に関しては、無縁社会と形容されるような今日の状況を踏まえた時、検討する意義はあるだろう。

本書は一次データを扱っているわけではなく、研究として特筆すべき新しい発見というものはないように思われる。それでも、様々な分野の研究をテーマごとに分かりやすく紹介しており、アメリカにおける既存の研究のレビューとしての意義は大きいと言える。また、同時に様々な家族を見るという作業自体の認識利得として、現代の新しい家族も歴史的な家族もグローバルに展開されている家族も「拡大家族」という共通の観点から理解できることが指摘できる。この拡大家族としての可能性をとおして、「開放的で、広い」家族観が説得的に論じられており、パークの本書における目的は十分達成されたと言えよう。

おわりに

本書を政治家にも読んでほしいという著者の願いは切実である。なぜなら、今日の政治の領域において

も家族の役割や責任が重視される場面があるからだ。注意しなければならないことは、パークの拡大家族の議論は決して過去へのノスタルジーに基づくものではないということである。むしろ、古いと考えられていた拡大家族が最も新しいという脱常識的な示唆は非常に社会学的である。私たちは社会変動にあわせて、サポートの在り方自体を見直し、家族のみに子育ての責任を負わせ過ぎないことを念頭に、将来の家族の豊かな可能性を考えていく必要があるだろう。そのきっかけとして本書は有効であると思われる。

注

1）これから論じられる新しい家族の形態に対して、ここ数十年のモデルとなった家族を著者は「伝統的な家族」と位置づけているが、この「伝統的な家族」は 1950 年以降広く浸透した。日本の家族社会学の用語では「近代家族」と呼ばれている。

2）近年では “*Child Psychology: A contemporary Viewpoint* ”2008,McGraw-Hill Humanities. がある。(xi)

3）原語は family process である。この後は簡略に「家族の営み」と記す。

4）子育てをする父親は SAHF(stay-at-home father) などと呼ばれており、近年少しずつ増えている。(45) その要因の一つとして、男性の失業率が高くなっていることが挙げられている。

5）母親と同様に乳児との接触によってオキシトシンが増加する。パートナーの妊娠のサイクルによって男性ホルモンが減少することがある。(37)

6）脳科学からはどちらの親も乳児の泣き声に、感情的に重要な信号として反応しているという結果が出されている。(39)

7）IVF（体外受精）や ICSI（顕微授精）といった ART（生殖補助技術）を用いた出産や代理母出産などのことである。(111)

8）社会的な子育ての実践や家族を超えるような営みについては、渥美 (2014) や牟田 (2014) が詳しい。

文献

渥美雅子編 ,2014,『家族をこえる子育て』工作舎 .

牟田和恵編 ,2010,『家族を超える社会学――新たな生の基盤を求めて』新曜社 .